

であったであろう。時ならぬ鹿の鳴く声が貴きあたりのお耳に達した。宮中に於ては鳥一羽死んでいても不吉だと陰陽師に掛を立てさせる程であるから、この時は天子様始め堂上高家の方々は大層不安をおぼえられた。

南部弥六郎殿はお上のお心を安んずるために一首を献じた。

「秋の霧 春立つかすみと まごうれば

時を忘れて 鹿の鳴くらん」と

これを聞こし召した主上は平生関東武士は教養のないものとの先入観があられたものだからいたく賞でられ

「そも何人であるか」との下問があった

答えて云く

清和天皇 経基王が八代の後裔甲斐の源氏光行が子孫にしてと家系を言上した。

氏素姓の判らぬ者の多い中にわけても殊勝な武者よとおほめをいただいた。

盛岡の南部公も名代弥六郎殿のことを殊の外感ぜられ以来遠野南部家は代々弥六郎を以て名乗るよう仰出された。

その時の主上からの御下賜品が京都の疑宝珠現在の上ノ橋、中ノ橋に飾られていたものだと伝えられている。

田口信之記

(十) 日昌上人の遺稿「くさぐさ」

〔廿四世日昌上人病床にて毎日少しずつ書きためたもの。〕

先住職日昌上人は、私達檀信徒にとっては忘れ得ない柔かい笑顔とその眼差しで気軽に呼びとめら



れ、様子を尋ねられ、信仰の大切さを何気なく一言申され、偶々読書中の良書を紹介されたり興が湧くならばその中の一節を繕いて優しく解説するのでした。時にはその御本を頂戴したものです。冗句もあり、柔和の中にも揺るぎない信仰心の強さが滲み信頼感と説得力が溢れて、対する者に安信感を持たせて下さいました。晩年病床に在ってメモしおかれたものを計らずも手許においてそのマ、勝手に活字に残させて頂くことにした次第です。

飴屋の縮尻しくじり

これは私が七、八歳頃の出来事である。春もばかばかと暖かくなる、日射が長くなる、道路が乾いて来る。

大底は午後の三時か、四時頃でもあつたらうか、隣村になっている下の部落から、きれいにみがいした寿司桶の周囲には、小さな色とりどりの小旗を差し立て、それを頭に戴せて忠臣蔵の討入りの時にうちならず山鹿流の陣太鼓のような太鼓を、遠くからも聞えるようにうち鳴らしつゝ派手な衣服に手足のこしらえ。

近づいて来るに従って、歌の文句、いつもきまったように、広っぱに立ちどまっては、口説と云うのか一種の家庭悲劇などの物語りを聞かせるのである。その口説の合い間かひに二銭か三銭の餽かかしを旗をつけて売りつけるのである。

飴もうまかったが、すぐに破ってしまう旗がほしかったのか、時には部落のおばさん達が二人三人出て来てその口説を聞きほれていたようだった。

鈴木主人と云う土まむらいは女房持ちにて、二人子供のあるその中を、今日も明日もと女郎買おんなかひいばかり。と口説きすゝんで、女房と二人の子供のあわれなくらしに涙をさそわれるのである。

思い余ったその女房は、遂に生活に堪えかねて、首をつって死んでしまうのである。

その時だった、十二、三になろうと思われる男の子が、首をつるってどうするんだと飴屋にたづねた。

飴屋は、よせばよいのに「どうれ、それでは教えてやろうか」と、木の小枝に細ヒモをひっかけ、それを首にまいて、くさりかけた木の根をけとばして小枝にぶら下ったが、そのまま鼻をたらし息たいて伸びてしまったのである。よせばよいのに教えてやるぞと自慢して自演したのはよかったが、何と馬鹿な事をしたことか。

それからその広っぱを通るのが、こわくなって横目でにらんで歩いたものだ。

正月

正月になると親類の人達が、手拭と塩釜（菓子）を持って年始に来る。囲炉裏の横座に座って挨拶をし、たいした事もない正月の御馳走を振舞われて帰って行く。御馳走は大抵鮭の照焼が大将であとは、壺につけた数の子醬油漬それに牛蒡のキンピラ、白黒の大きな何豆と云うのか、それから中味はどんなものが入っていたのかお袋の茶碗蒸らしい汁物もあった。

子供心にはそれは本当の御馳走のように思えて相当に数の子を食べたらしい。私も誰につれられて行ったのか、石末、花岡など二、三キロの処にある親類に行つて五錢位の小遣いを貰つたのを覚えていてる。遠い岡本や神長（大宮）の家には行つたことがない。それがどんな関係の縁戚になっているのを？

花団子

正月の十五日の朝は誰か相当見当をつけておいた水木（ミツキ）の二米程（五、六尺位）の若木を山から伐りとつて来て、表座敷の middle に真座を敷いてその上に石臼を持ち出して、その穴に水木の根本をしっかりと固定させ家内中揃つて冷たくなつた団子をその小枝々々にとりつけるのである。そして梶棒の太目のやつを七、八センチに切り、それに鉋で切れ目をつけて米俵に見せるのであろう。今年も豊年である様にとの願いをこめてとりつけるのである。そして二、三日して団子もすっかり硬くなつているのを適当に枝を折り取つては炉端に行き灰の中につっこみ焼き乍ら食べる味は何とも云え

ぬものがあつた。

置き鉤

小学一、二年生の頃であつたろう。学校から帰つてくると、台所から米とざるを持ち出して西の小川へとんで行き、浅瀬の小魚のかくれていそうな所にざるをすえて足でおいだすのである。泥鰌どじょう時にはあまり大きくない鯰なまずなどがとれたものだ。これに興味を持っていくつかざる箆ざるをこわしたことが、そしてまたどれだけ叱られたことか。遂に母も叱ることを諦めて籠屋に頼んで魚とり専用の「フミタデ」をこしらえてくれた。それから天下ごめんの魚とりである。

それから夜の置き釣つりに変わってゆくのだが、是は朝早く起きて置き鉤はりをとりに行くので却つてよるこんでいたらしい。鰻の太いやつが死んで白くなっているのをみると残念でならなかつた。置き鉤も十本から二十本そして三十本とふい（増え）獲物も多くなり、お前は漁師になるのかなど馬鹿にされたものだ。今はどうなつたが、魚は沢山いたらしかつた。

好き嫌い

母がよく言つていた。「金持は麦飯を食い貧乏人は米の飯を食うものだ」と。家はどつちなんだか、粟あわめし、麦めしの毎日であつた大根めしは十二月廿八日、大掃除の朝の食事ではあまり歎心しなかつた。

小学校三年生か四年生の時だつた。子供の反抗期といふのか少しく小生意気になつた頃だつた。余り大きくない山本たねと云う女の先生が担任だつた。唱歌の考査だと云うので一人々々オルガンの前に立たされて、指定のところを歌うのだが、みんなと一諸だと何と云うことなしに歌っているのだが一人あらたまって歌うことになる調子があわない。何度かくり返したあと「それでは君が代をでもうたいなさい！」馬鹿にされた口調で云われたような感じがしたので「チビッターネー」と一声叫んで自分

の椅子に坐ったことがある。それから品行は内、唱歌は内、今日の音痴になったような気がする。教育はむずかしいものだ。法華経では、開示悟入と云っているが、先ずやる気を起させることが第一である。

好き嫌いその二

今日一月廿八日、病院の昼の食事にウドン焼き魚それに冷いものなど全く立派なもので文句など云われるべきものではない。殊に私はウドンが好きで曾て関清秀さんの奥さんがなくなつてその速夜の時だった。

亡くなった奥さんの妹さんのお亀さんが、沢山つくつたからお変りして召し上つて下さいと云うのでその気になつて何杯お変りしたのか、遂い、言葉にあまいた腕をさし出した時だった。もう無いとの事でその処置で困つたことがあつた。なければ「さあどうぞ」とお変りをすゝめなければよいものを、恥をかゝしたり、こんなに困つたことは私にはなかつた。

その時は主人清秀さんと兄さんの松太郎さんそれに長女簪の佐野先生の私を入れて五人であつたが、用意した五人分を頂いてその上お変りをした事である。これが人知れ渡つて“ウドン”好きな○さんと云われ、今日に至っている。

それが、今日ウドンなのである。食欲がないと云うのか少し手をつけた俣にして、魚も野菜のそれも手をつけられなかつた。

好き嫌いするのはわがまゝだと看護婦さんに教いられた。婦長さんシアア、スンニ、スジャータ。

(十一) 日堂上人の挨拶書簡

先住第廿四世日昌上人 名は田口公信師